

# 地域の水辺空間に対する子どもの認識と関わり

## —新潟県福島潟地域を対象として—

5218D008-9 大森匠悟\*

子どもたちは日常生活を通じて地域社会と関わり、地域イメージを捉え、自分たちが住むまちの理解と関心を養っている。特に地域に豊かな環境資源がある場合は、その利活用や将来のまちづくりの担い手としても子どもたちの認識を知ることは意義がある。そこで本研究では、豊かな自然空間及び地域との関わりが深い水圏を有する新潟県福島潟周辺の中学校生徒を対象に、地域の子どもの地域認識の実態と特徴を明らかにすることを目的とする。そのために、新潟市立葛塚中学校の生徒に対して、周辺環境の認識を問うアンケート調査とグループインタビュー調査を行った結果、生徒は実際に福島潟を訪れ身体感覚的経験を経ることによって、具体的な認識を得ていることが分かった。また、子どもと福島潟の両者を媒介するのが、主に福島潟周辺に整備された施設や機能であることを明らかにした。

*Key words:* 湿地空間, 地域認識, 中学生, 福島潟

### 1. 研究の概要

#### 1.1 研究の背景と目的

子どもたちは、普段の生活や学校での活動を通じて自分たちが住むまちへの認識と関心を養っている。

そうした背景の中で、都市計画・まちづくりの分野においても、将来のまちを担う地域の子どもたちに対する「まちづくり教育の重要性」が謳われるようになり、日本では2000年代ごろから「総合的な学習の時間」が導入されるなど地域学習とまちづくり教育の議論がより活発となった<sup>1)</sup>。

その一方で、ランドルフ・T・ヘスターは居住の形態を賢明に選択するために必要な知識を都市生態学と概し<sup>2)</sup>、都市をデザインする際には、その土地に関する知恵と科学的原理の両方を居住地区に組み込む必要があると、実地教育や現場学習と教室での授業の間には大きな溝があるとする論説<sup>3)</sup>を取り上げつつ、述べている<sup>4)</sup>。

では、ヘスターの論を踏まえると、「土地の知恵」を獲得できるような豊かな生態系と自然空間を有する土地では、実際に地域の認識と理解がどのように生まれているであろうか。そこで本研究では、自然空間の場の具体例として実在する水辺空間で、地域の子どもがどのように認識しているかの実態把握に努める。特に地域に豊かな環境資源がある場合には、その利活用や将来のまちづくりの担い手としても子どもたちの認識を知ることは意義があるためである。

具体的には新潟県新潟市北区に存在する福島潟周辺に住む中学生にアンケート調査を行うことで、福島潟とその周辺の環境をどのように認知しているかの全体像を把握する。第二段階として、インタビュー調査に協力が得られた生徒の発話から、より具体的な認識や体験の記憶を把握する。

#### 1.2 既往研究の整理

本研究に関連して、a)調査対象地の福島潟に関する研究とb)子どもの風景認識や教育現場における地域風景の捉え方に関する研究c)地域認識の分析手法に関する研究を示す。

##### a) 調査対象地の福島潟に関する研究

齋藤<sup>5)</sup>は日本海沿岸に分布する潟の生態的把握のために、福島潟を対象とし、検地図などの古地図を通じ、福島潟の干拓の経緯やそれを取り巻く周囲の暮らしや生業の変容について論じている。

佐々木ら<sup>6)</sup>は新潟県内に位置する湿地空間である福島潟と佐潟の地域活動に着目し、双方の潟の成立背景と、地域活動団体の活動の概要について整理している。

Ogawa and Fukumoto<sup>7)</sup>は干拓に伴う福島潟の開かれた空間の変化と愛着形成の相関性に着目し、ライフスタイルの変化による福島潟の利活用の違いが愛着形成にの相関性に影響を及ぼしているとしている。

##### b) 教育現場における地域風景の捉え方に関する研究

小野ら<sup>8)</sup>はまちづくりの重要な要素の一つである景観を学校教育に取り入れることの可能性に着目し、景観教育を行っている小学校の児童や保護者、教職員を対象にアンケート調査を行い景観への意識分析を行うことで、地域の体験学習などを通じた、地域を巻き込んだ教育を行っていくことが重要であると示唆している。

##### c) 地域認識の分析手法に関する研究

西村<sup>9)</sup>は地域認識の抽出方法と得られる認識の傾向や特性を明らかにすることを目的とし、過去1985年～2014年の間の査読付き論文をレビューし、各研究で用いられた地域認識の抽出手法を整理した。その結果、認識の抽出手法は「記述」「発話」「行為」「資料」の4つの媒体に分類され、抽出する地域資源や認識によって、それぞれ適した具体的な手法が選択されていることが分かった。

### 1.4 本研究の位置付け

関連する既往研究として大きく分けて上記3つの研究テーマに大別した。本研究においては子どもを対象者としたうえで、大きく分けて2段階の調査を行い、西村の研究で用いられた認識の分類手法を援用することで、豊かな水辺環境を有する地域の子どもの地域認識の実態と特徴を明らかにする。

## 2. 対象地の概要

### 2.1 対象地の概要

調査対象地に選定した福島潟の過半が属している新潟市北区は総面積 107,72 km<sup>2</sup>、人口 788,465 人、29,254 世帯（令和元年 12 月末日現在）である<sup>10</sup>。政令指定都市である新潟市の中で最北部かつ最東端に位置する行政区であり、北区は旧新潟市域の北側地区（濁川・松浜・南浜地区）と旧豊栄市域で構成され、福島潟は北区の中で旧豊栄市域に位置する。旧豊栄市域は 2005(平成 17)年に新潟市に編入され、新潟市の政令指定都市化に伴い 2007(平成 19)年に北区が成立している。

### 2.2 福島潟について

福島潟は新潟県北区の新鼻地区と新発田市の市境にまたがって位置する淡水湖である。北区の日本海側は砂丘地であるが、内陸部の中心市街地や福島潟周辺の標高は 0-2 メートル未満と低く、古くから洪水による湛水被害が生じやすい地形であった。福島潟は新潟市内で最大の面積を有する潟であるが、江戸時代に阿賀野川の松ヶ崎開削により、福島潟の水位が低下し次第に干拓事業が進められるようになった。現代では昭和 40 年代に行われた国営福島潟干拓建設事業により 193ha の大きくなり、更に現在は河川改修事業(湖岸堤などの整備)により干拓地が一部潟に戻り、潟面積は 262ha になっている。

潟の北岸には自治省による福島潟自然生態園整備計画の一環で水の駅「ビュー福島潟」や自然観察施設などが整備され、ビュー福島潟の屋上からは福島潟と遠景の五頭山脈を一体として望むことができる。また、国の天然記念物であるオオヒシクイの日本一の越冬地であり、オニバスの国内の自生の北限地としても知られる。

### 2.3 新潟市立葛塚中学校について

本研究では、福島潟周辺に位置する新潟市立葛塚中学校の生徒及び保護者に調査協力を得ている。

葛塚中学校は旧豊栄市の中心部である葛塚地区のおよそ半分を学区として占め、葛塚東小学校の生徒が持ち上がりで進学している<sup>11</sup>。また、2019 年度からは、旧太田中学校の生徒が中学校閉校に伴い、葛塚中学校に編入している。

従来葛塚中学校では、毎年 9 月に福島潟周辺で開催される「福島潟自然文化祭」に全校生徒が学校行事として参加しており、有志の生徒によるお化け屋敷の実施や国の天然記念物であるオオヒシクイの飛来を歓迎する雁迎灯のろうそくの設置手伝いなどを主に行っている。

## 3. 福島潟と周辺環境の認知に関する全体像の把握

### 3.1 アンケート調査の概要と設問内容

アンケート調査を行うことにより、対象となる中学校の生徒が日ごろから福島潟をどのように認知しているか把握する。実施したアンケート調査の概要とアンケートの設問項目の詳細について表-1 に示す。

表-1 より大きく分けて、「(a)福島潟周辺施設の認知」「(b)治水に関する施設の認知」「(c)福島潟周辺の活動への参加実態」「(d)地域の生態系の認知」に大別され、それらに対して選択式の回答と自由記述による経験や思い出などの個別具体的な印象を尋ねていく。また、アンケート調査では、生徒が保護者や親戚などに対して、福島潟の印象を尋ねてもらった結果をアンケート紙に記入してもらい、併せて保護者の福島潟に対する印象の把握を目指した。

表-1 アンケート調査概要

アンケート「私が知っている福島潟」			
調査対象	新潟市立葛塚中学校 (全校生徒345人)		
配布日	2019年8月29日 (木)	締め切り日	2019年9月4日 (水)
配布方法	教員に委託した配票調査	回収方法	教員に委託し、郵送回収
回収数	回収数総計：267部 (回収率77.4%) 内訳：第1学年 87部 第2学年 101部 第3学年 79部		
設問項目			
回答者の属性	学年、性別、居住地、居住年数		
周辺施設の認知	8つの施設に関してそれぞれの認知度を4段階で回答 知っている施設を最大3つ選択し、詳細を記述	対象地： ビュー福島潟、環境と人間のふれあい館、遊水館、潟来亭(休憩施設)、自然学習園、遊鳥広場、オニバス池、雁鳴れ舎 来訪頻度、初来訪時期、初来訪時の同伴者、施設について知っていること、思い出に残っていること	
治水施設の認知	新井郷川排水機場 福島潟放水路 福島潟周辺の堤防	施設の認知有無、来訪頻度、施設の役割の理解有無、施設の持つ役割について知っていること 施設の認知有無とその回数、施設の来訪有無、どこで知をしたか、施設の役割の理解有無、施設の持つ役割について知っていること 施設の認知有無、どのように知ったか、施設の持つ役割について知っていること	
福島潟周辺の活動参加実態	参したことがある活動を複数選択 最も印象に残っている活動についての記述	菜の花などの花見、湖舟乗船体験、ザリガニ釣り、自然文化祭への参加など合計18項目 最も印象に残っている活動について、どのような印象や思い出があるかを自由に記述	
福島潟周辺の生態系の認知	福島潟周辺で見られる生き物や植物について知っていることの記述	自由記述 記述項目：生き物や植物の名前、それを見つけた場所、見つけた時の感想	
インタビュー形式(身近な人に尋ねてみよう)	保護者の方や親戚の人に対して、過去の福島潟や今抱えている福島潟に対する印象についてインタビュー形式で尋ね、アンケート用紙にその内容を記載		

### 3.2 生徒の居住地の分布

回答が得られた葛塚中学校の生徒267名の居住地に関して、学年ごとの割合を図-1に示す。

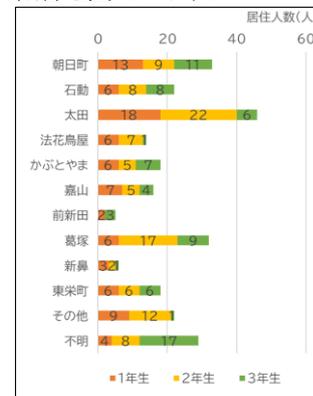


図-1 生徒の居住地

葛塚中学校の生徒は宅地造成が進められた葛塚や太田・朝日町の市街地を中心に居住し、大多数の生徒が福島潟周辺を通学路として利用していないため、福島潟周辺には、目的を持って訪れる場合が多いと考えられる。

3.3 単純集計結果による生徒の認識

a) 福島潟周辺施設の認知

福島潟周辺の各施をどの程度知っているか尋ねた結果を図-2に示し、それぞれの施設について過去に訪れた頻度について選択してもらい、整理したものを表-2に示す。

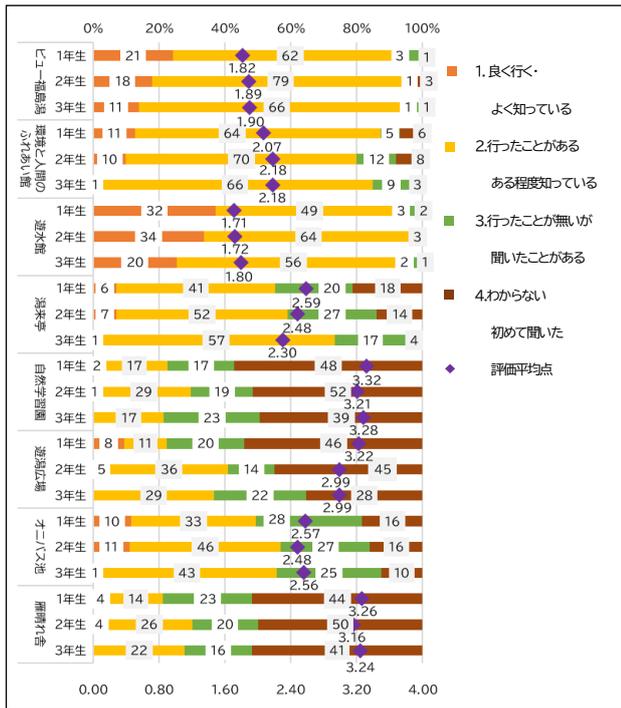


図-2 周辺施設の理解

図-2の結果より、「ビュー福島潟」「ふれあい館」「遊水館」の3施設がよく知られており、表-2の結果と見比べると、家族で出かけた際に訪れただけでなく、先生とも訪れていることから、小学校での課外活動の一環で訪れたケースが考えられる。これらの施設はいずれも学習型・体験型の施設として整備されたものであるが、草木の観察が出来る自然学習園や福島潟の野鳥の観測が出来る雁晴れ舎の認知が低いことから、福島潟やその周辺の生態系に関する知識の獲得が学習施設での理解に留まり、実際の場に足を踏み入れている経験に必ずしも結び付いていない可能性がある。

また、上記3施設は、中学生の住まいから比較的近い場所に位置し、福島潟の中でも葛塚中学校の近くに位置する施設ほど、生徒が訪れたことがあると答えていた。

b) 福島潟周辺の治水施設に対する認知

水辺環境は親水空間に限らず、治水などの機能も重要な役割を果たしている。福島潟周辺の治水機能を果たす各施設に関する認識を尋ねた結果について、図-3に示す。

各施設とも、「知っている・見たことがある」と回答した

表-2 過去に施設を訪れた頻度

施設名	行ったことはない	1回のみ	数回	とても良く行く
<b>ビュー福島潟 (n=220)</b>				
未訪問	3	3	181	2
初めて行った時期	幼稚園・保育園	小学校1~3年	小学校4~6年	中学校1,2年
親と初めて行ったか	家族	友だち	先生	その他
<b>ふれあい館 (n=139)</b>				
未訪問	1	21	96	11
初めて行った時期	幼稚園・保育園	小学校1~3年	小学校4~6年	中学校1,2年
親と初めて行ったか	家族	友だち	先生	その他
<b>遊水館 (n=230)</b>				
未訪問	3	3	145	62
初めて行った時期	幼稚園・保育園	小学校1~3年	小学校4~6年	中学校1,2年
親と初めて行ったか	家族	友だち	先生	その他
<b>雁来亭 (n=39)</b>				
未訪問	3	3	24	7
初めて行った時期	幼稚園・保育園	小学校1~3年	小学校4~6年	中学校1,2年
親と初めて行ったか	家族	友だち	先生	その他
<b>自然学習園 (n=3)</b>				
未訪問	0	0	3	0
初めて行った時期	幼稚園・保育園	小学校1~3年	小学校4~6年	中学校1,2年
親と初めて行ったか	家族	友だち	先生	その他
<b>遊水広場 (n=7)</b>				
未訪問	0	0	5	2
初めて行った時期	幼稚園・保育園	小学校1~3年	小学校4~6年	中学校1,2年
親と初めて行ったか	家族	友だち	先生	その他
<b>オニバス池 (n=45)</b>				
未訪問	11	0	17	3
初めて行った時期	幼稚園・保育園	小学校1~3年	小学校4~6年	中学校1,2年
親と初めて行ったか	家族	友だち	先生	その他
<b>雁晴れ舎 (n=6)</b>				
未訪問	0	0	5	1
初めて行った時期	幼稚園・保育園	小学校1~3年	小学校4~6年	中学校1,2年
親と初めて行ったか	家族	友だち	先生	その他

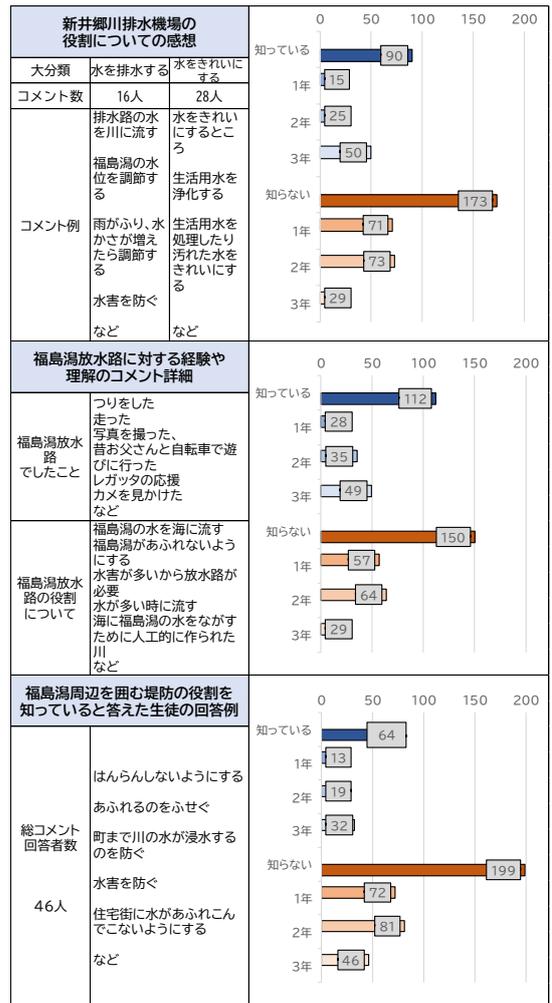


図-3 治水施設に関する認識

生徒は半数以下であるが、学年が上がると、各施設の認知度は上昇し、中でも福島潟放水路の認知が他の施設に比べて高い。一方で、福島潟放水路や福島潟周辺の堤防が果たす役割についての記述は概ね実際の役割と相違ない回答が多くみられた。特に福島潟放水路に関しては、日常的に利用や関わりを持つ生徒が釣りを楽しんだり、放水路沿いをランニングするなどしている。

**c) 福島潟周辺の活動への参加実態**

福島潟周辺では、自然環境を活かしたイベントなどが数多く開催されている。すなわち、これらのイベントに参加することは、生徒が福島潟を取り巻く自然環境を認識する機会となる。生徒がこれまで関わりを持ったことがあるイベントでどのような経験を得たかを尋ねた結果を、図-4に示す。図-4には、生徒がこれまでに参加した活動の中で、最も思い出に残っているものを学年ごとに示している。1年生は、家族や友達と福島潟周辺に咲く菜の花を観に出かけた経験を、印象的な思い出として挙げているが、学年が上がるにつれ、学校行事として参加している自然文化祭に対する思い出が強く表出していることが分かる。

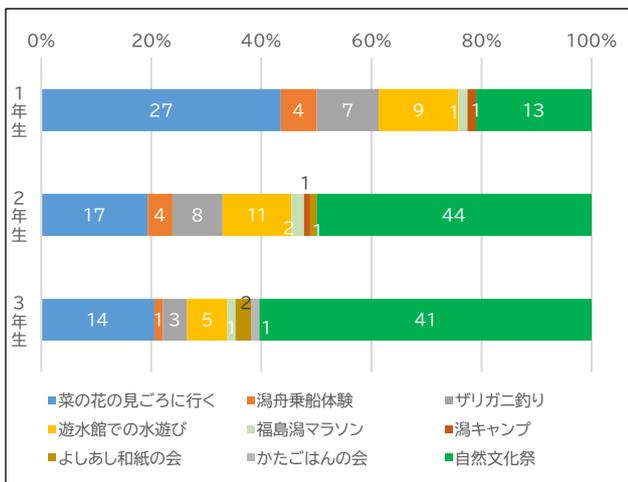


図-4 最も印象的な活動

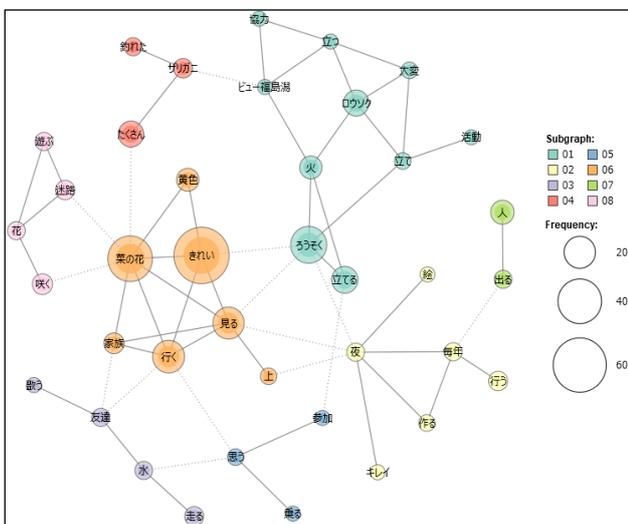


図-5 思い出の記述に関する共起ネットワーク図

さらに、選択した活動に関して、思い出に残っていることについて詳しく記述をしてもらい、それを「KH Corder」による共起ネットワーク図を作成したものが図-5に示す。

図-5の結果から、生徒の印象に残っている出来事の記述に関して、大きく分けて、「きれいな菜の花を見に行ったこと」「ろうそく立てを行い大変だったが、点いた火はとてもきれいだったこと」「ザリガニ釣りでたくさんザリガニを釣れた」ということが分かった。

**d) 地域に存在する生態系の認知**

福島潟周辺の生態系に関して、実際に見た経験を尋ねた質問の結果の集計を図-6と図-7にそれぞれ示す。

生徒が見つけた生態系を「生き物」と「植物」に大きく分類するとその割合はほぼ同数であるが、植物の大半は福島潟に存在するなのはなとオニバスを挙げている生徒が大半であり、生き物は多くの種類が挙げられたが、オオヒシクイとザリガニが特に多く挙げられる結果となった。

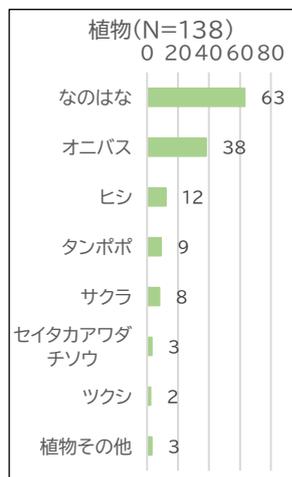


図-6 植物の認知

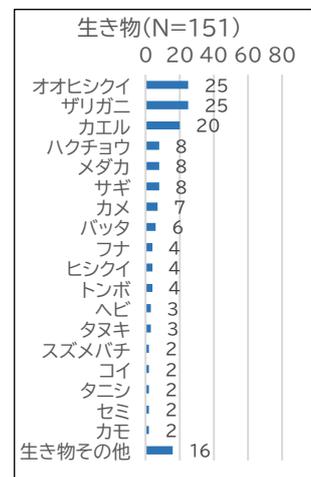
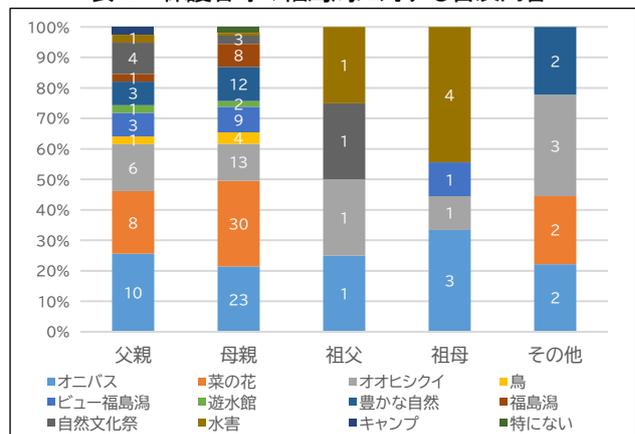


図-7 生き物の認知

**e) 保護者へのインタビュー結果による認識**

生徒に対する調査と併せて、保護者や親戚などに対して、福島潟の印象を生徒から尋ねてもらった結果をアンケート紙に記入し、表-3に結果を示す。

表-3 保護者等の福島潟に対する言及内容



保護者へのインタビュー結果より、母親や父親は福島潟に対するイメージとして、自然環境やビュー福島潟などの施設について多く挙げている一方、祖父母では水害を挙げた方が多く占めていた。

3.3 自由記述回答の分析による生徒の認識

自由記述回答の内容から、生徒の認識対象の要素の分析を行う。具体的に、西村の研究<sup>9)</sup>でのテキスト分析の手法を援用し、自由記述内容に記載があった1事象につき、表-4に対応する分類に基づき整理した。

表-4 認識と認識対象の種別

大分類	小分類	大分類	小分類
A. 経験的認識	a. 現在	C. 印象的認識	g. 好印象
	b. 過去		h. 悪印象
B. 説明的認識	c. 現在の状況		i. 程度の把握
	d. 過去の状況	j. その他	
	e. 知識	k. 課題	
	f. 名称	l. 要望	
		D. 課題的認識	m. 提案

a) 記述量の傾向

自由記述回答の記述数をエレメント数として集計し、生徒の自由記述の総エレメント数を分布で表したグラフを図-8に示す。生徒の自由記述のエレメント数は、8~11の数のレンジに収まっている生徒が最も多い。子どもの地域認識の実態を詳細に明らかにするために、記述量が多い生徒の記述内容に着目し、総エレメント数が多い上位約24%の生徒 (N' =64) の認識に関する分析を行う。

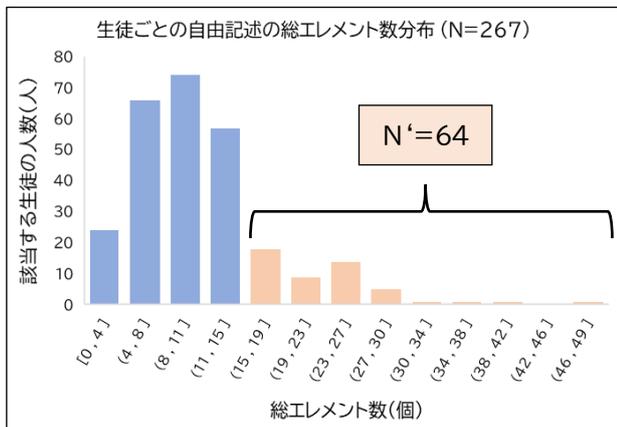


図-8 生徒ごとの自由記述のエレメント数分布

b) 設問別による生徒の認識の分析結果

福島潟に関するそれぞれの設問に対して、知っていることや、実際に訪れた際の思い出に関する自由記述回答の内容を分析し、認識対象をグラフにまとめた分析結果を図-9に示す。内側の円グラフは生徒の認識を大分類で整理し、それぞれの認識を更に小分類に分けた結果を外側の円グラフ表している。

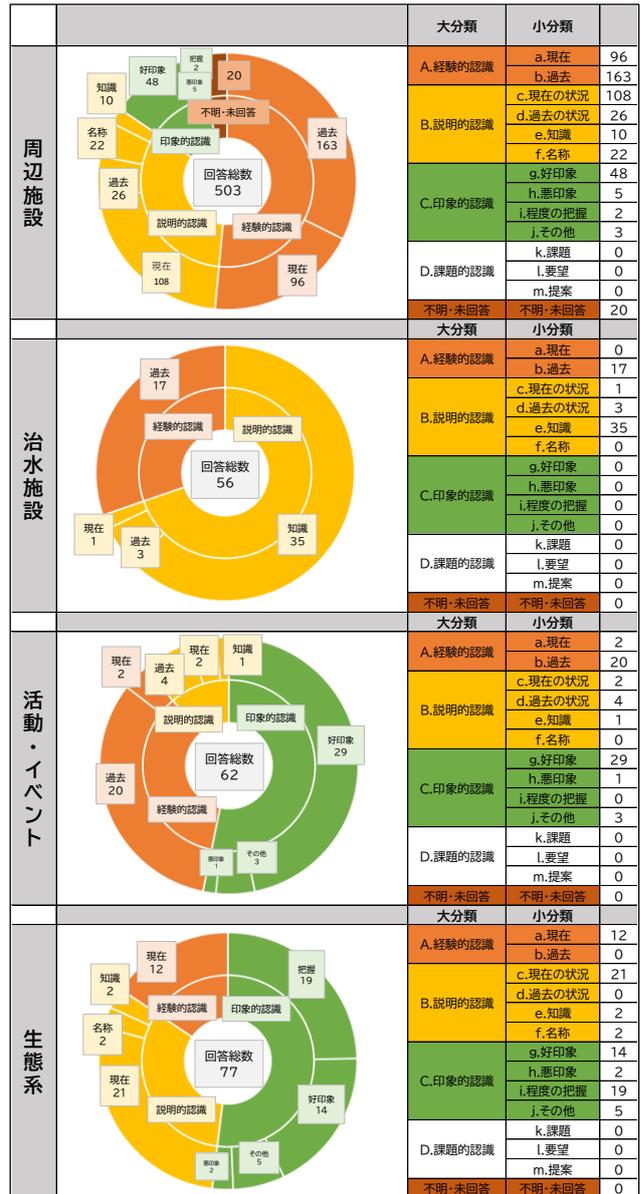


図-9 記述量が多い生徒の福島潟周辺の認識の要素

① 周辺施設に関する認識の分析

最も多く記述がみられたものが経験的認識であり、特に過去の学校行事や保護者との外出の経験を記述した生徒が多くみられた。一方で次いで多い説明的認識においては現在の状況を説明したものが多く、施設でどのような学びや体験が得られるかに関する説明の記述が多くあった。

② 治水施設に関する認識の分析

治水施設に関して、説明的認識が認識の多くを占め、次いで経験的認識が見られているという結果となった。さらに、認識の小分類を詳しくみていくと、知識に関する記述が多く、学校で治水施設に関して、学校で学んだことを説明している生徒が多くいた結果となった。

③ 活動・イベントに関する認識の分析

半数以上が印象的認識の記述が見られ、その大多数は好

印象であった。また、次いで多い認識が経験的認識であり、これらのことから葛塚中学校の生徒は、活動やイベントに関して自然文化祭での手伝いなど、実体験をもとに記述がされている場合が多いことが考えられる。

④ 福島潟の生態系に関する認識

生態系の認識も活動やイベントに関する認識と同じく印象的認識が最も割合として高く、実際に生態系を認知することが、生徒の印象的認識に作用していることが結果より考えられる。しかし、活動やイベントに関する認識とは異なり、次いで多いのは説明的認識であり、その記述に関しては、「現在」の割合が高く、特にその時に見つけた生き物や植物のその時の様子まで書き記していると考えられる。

4. グループインタビュー調査による生徒の認識

4.1 グループインタビュー調査の概要

グループインタビュー調査にご協力頂いた生徒の発話内容から、具体的な認識や体験の記憶を把握する。

本研究におけるインタビュー調査はグループ形式で実施している。また、インタビューを実施する前に、「私が知っている福島潟」と題したグループワークを実施し、生徒には自由に過去の記憶を想起してもらう機会を設けた。これらの狙いは、グループワークとインタビューそれぞれで自由に発言を促すことで、自分がすぐには思い出せなかった潜在的な過去の記憶を呼び起こされることを期待しているためである。表-5にインタビュー調査の概要を示す。

表-5 インタビュー調査概要

実施日:2019年12月9日(1日目)						プログラム内容	
季節グループ		時間帯グループ		時間目安	季節グループ	時間帯グループ	
ID	学年	性別	ID	学年	性別	—	生徒集合
1	1	男子	2	1	男子	10分	趣旨説明とアンケート内容の振り返り
4	1	男子	3	1	男子		
5	1	男子	6	2	男子		
8	3	女子	7	3	女子		
9	3	女子				全体20分(作業15分、発表5分)	ワーク①:今まで訪れた場所を示そう 大判地図にこれまで目にした、訪れたりして実際に記憶に残っていることをマッピング →作業後、最も印象に残っていることについて班ごとに発表
実施日:2019年12月10日(2日目)						お茶休憩	
ID	学年	性別	ID	学年	性別	5分	
10	1	女子	13	2	女子	全体20分(作業15分、発表5分)	ワーク①:季節をテーマにマッピング「季節」を1つの条件としてマッピング →作業後、同様に班ごとに発表
11	1	女子	14	2	女子		
12	1	女子	15	2	女子		
17	3	女子	16	2	女子		
18	3	女子				5分	総括
						—	調査終了



図-10 プログラムの成果物一例

4.3 インタビュー結果の分析

最後に、調査協力者の生徒から得られたグループインタビュー結果から代表的にどのように認識が具体的にされたか、インタビュー協力者の認識分析結果を図-11に示し、その際の季節や時間帯・場所などの要素を分類した結果を図-12に示し、生徒の認識対象を分類した結果を図-13に示す。

調査協力者のインタビュー内容の認識は経験的認識が最も多く、過去の経験に関する記述がなされていた。次いで多い認識は説明的認識であり、現在の福島潟周辺の様子や施設の状況に関して詳しく説明されたものがあった。

また、生徒の認識の要素に関しては、季節に関する記述の書き込みに季節ごとの偏りはなく、それぞれの季節において、福島潟に関する認識の記述があった。時間帯に関する記述の書き込みは朝の時間帯が比較的多く、日中に関する記述が少ない結果となった。これは、生徒が登校時における地域に対する認識に関する、発話が多く見られたことに起因している。また、認識対象となった場所に関しては、福島潟周辺の施設や放水路に関して一定数の認識があったことが示され、福島潟以外の地域の認識対象としては公共施設に関する発話が多く見られた。このことから、地域の認識対象として、福島潟周辺に限らず、生徒の認識に地域に存在している公共施設とその施設における機能が生徒の地域を認識する機会を誘引していることが考えられる。



図-11 インタビュー協力者の認識分析結果

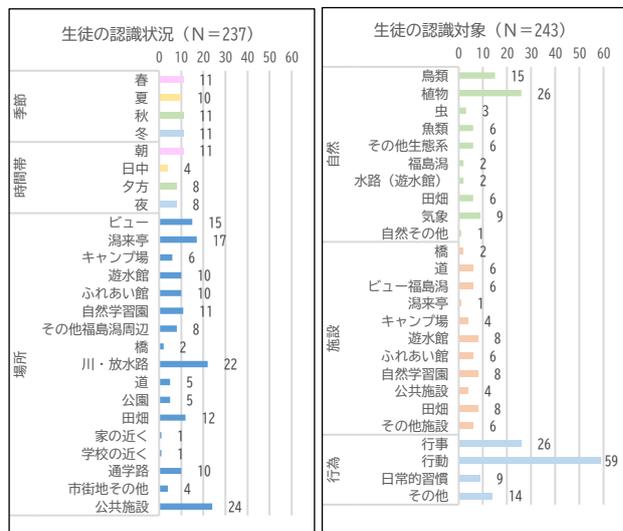


図-12 生徒の認識状況

図-13 生徒の認識対象

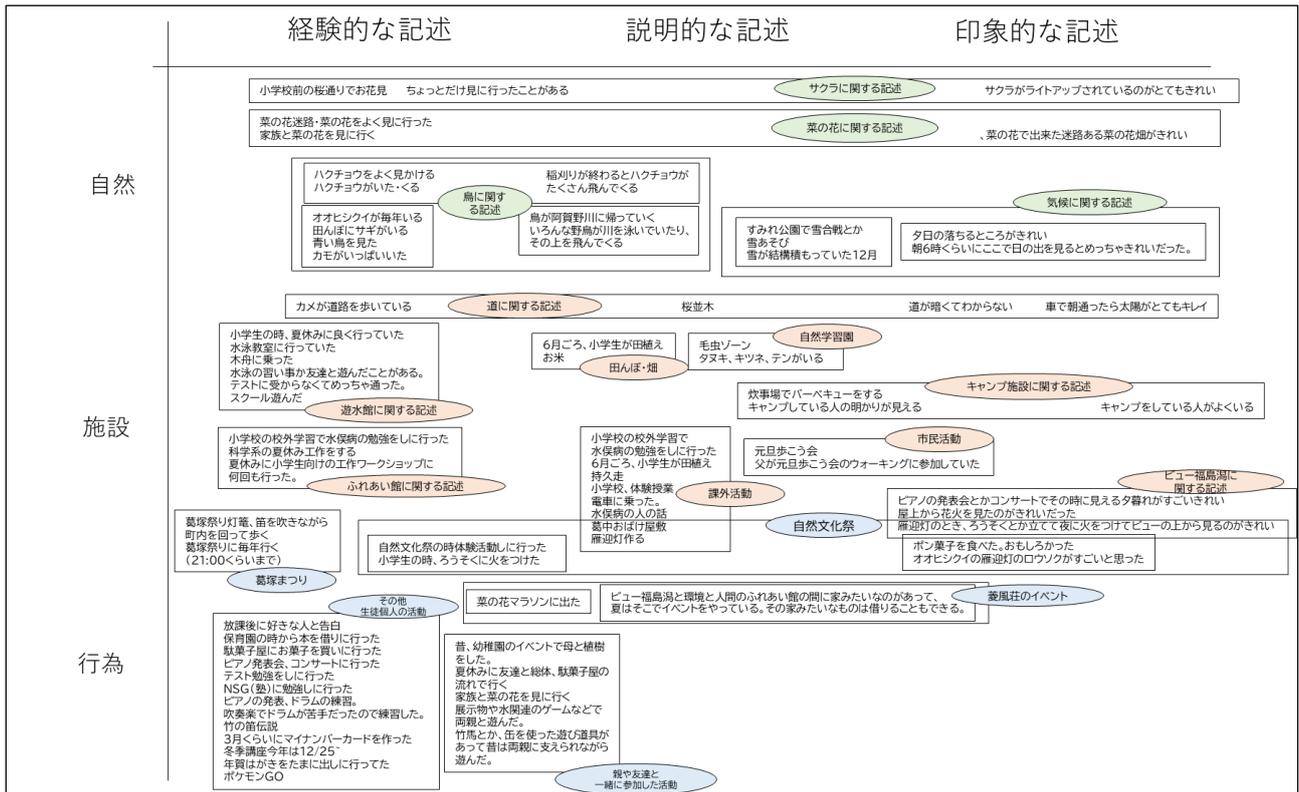


図-14 インタビュー内容整理図

次に認識対象に関する記述の結果を見ると、生徒は植物や鳥類の生態系に関する記述が福島潟周辺の「自然」に関する記述の中では多く、「施設」に関する記述は福島潟周辺の施設を中心に、多様に認識対象が分かれていた。

また、行為に関する記述は自分遊びに行ったり、親や友達と訪れたケースが多く、学校などの課外活動や市民活動に関する「行事」の項目の倍以上の結果となった。

#### 4.4 グループインタビュー結果のまとめ

最後に、調査協力者の生徒から得られたグループインタビュー結果から代表的などのように認識が具体的にされたか、インタビューの発話から認識の中を含む体験や記憶を整理した図を図-14に示す。

インタビュー結果から、福島潟周辺に関する発話が図-14の通りであり、「自然」「施設」「行為」それぞれの項目に関して福島潟周辺に整備された施設を中心に多様な認識が得られていることが分かった。特にインタビューの発話では、全体を通して経験的認識や印象的認識など、自身の実体験をもとに説明された内容が多かった。

個別具体的に詳しくみていくと、まず菜の花畑に関する発話には、毎年春の時期に菜の花が開花することから、福島潟における菜の花の開花が生徒にとって春という季節の訪れを表す機会として、受けとめられていることが分かった。

次にビュー福島潟に関連した発話に注目すると、ビュー福島潟やその周辺から見える福島潟の景色に強く印象に残っていることが分かった。ビュー福島潟における、本来の

文化情報発信拠点としての役割の中で、ビュー福島潟の施設から捉えられる福島潟の直接的な景色が生徒にとって大きな要素となっていることが分かる。これは、全体のアンケートにおいても、自然文化祭でビュー福島潟から見える雁迎灯の美しさに感動するコメントが多くあったこととも関連しているといえる。

他にも、自然学習園でオニバスを目にしたこと、遊水館に設置されている水路で木舟に乗って遊んだ経験などが発話内容として示されていた。

以上のことから、中学校生徒の福島潟に関する認識には、福島潟周辺に整備された施設や機能を媒介して、福島潟とその周辺の環境を認識していることが結果より考えられる。それはすなわち福島潟との関わりを生み出す一つの機会になりえるという事である。

また、整理図の傾向として、「行為」に関する記述には、印象的な記述があまり見られず、一方で「自然」の項目に関して印象的な記述が多くなされている結果となった。

この結果から、「自然」などの生態系と生徒の関わりが、生徒の印象に残る深い認識に繋がると考えられる。このことは、これまでのアンケート調査の「活動・イベント」や「生態系」に関する認識の分析結果においても同様の結果が示されている。

## 5. まとめ

### 5.1 本研究の成果

アンケート調査とグループインタビュー調査結果から、福島他周辺に居住する子どもたちの地域認識の実態と特徴を明らかにすることを試みた。その結果、生徒は実際に福島潟を訪れ、植物や生き物などの生態系を実際に目に触れたりするなど、身体感覚的経験を経ることによって、生徒に具体的な認識に結び付いていることが分かった。特にその時の深い認識は、生徒の感じたことや心に思ったことなどの印象に繋がっていることが明らかとなった。また、その際に子どもと福島潟の両者を媒介するのが、福島潟周辺に整備された施設や機能であり、重要な役割を果たしているといえる。これらより、福島潟における自然・文化施設の整備や地域団体による活動などの取り組みが生徒の認識と福島潟との関わりに大きく関係していると考えられる。

加えてアンケート調査結果から、学校行事として自然文化祭に参加したことが、福島潟で最も印象に残っている出来事として述べている生徒が中学生の学年が上がるごとに増えていったことから代表されるように、学校行事や福島潟周辺で行われているイベントは子どもの福島潟への認識と意識を結びつける触媒としての役割があると考えられる。

一方で、生徒の認識には西村の既往研究にて、大人に向けた認識の分析とは異なり、課題的認識に関する記述は全く見られなかった。地域を認識し、普段の生活を通じてまちへの課題が大人になるにつれて醸成されるとともに、この点がまちへの愛着形成へと関連していくのではないかと考えられる。

また、生徒が新井郷川排水機場へ見学した際の例があるように、新井郷川排水機場の治水施設としての役割を正しく理解していない状況が生じてしまっているなど、これらの機会が却って生徒の正しい理解を妨げてしまう可能性も指摘された。学校教育における地域学習での適切な理解を求めるためには、学内外問わず、生徒に地域の歴史や文化を説明や紹介をする人は、誤認が無いように一定の注意を払っていく必要があると言える。

### 5.2 今後の展望

過去の干拓や治水工事を踏まえ、これまでの福島潟自然生態園整備計画によって福島潟の北側周辺に整備された各施設は、福島潟に新たな自然文化を発信する拠点として、福島潟を取り巻く環境と子どもたちに与える認識への影響は大きいものであったといえる。

子どもたちにとって今後更なる、福島潟に対する本質的な理解と将来的な地域への愛着形成に関連させていくためには、媒介する周辺施設や機能への利活用と、触媒としての学校での活動やイベントの双方の観点を意識したうえで、子どもに体験や学んでもらうことの意義と目的と都度確認しながら、実施することを考えていく必要があるのではないかと推察する。

### 参考文献

- 1) 安藤真理：子供を対象とした「まちづくり学習」の学校教育における展開の可能性に関する研究, 東京大学都市デザイン研究室修士論文, 2001
- 2) ランドルフ・T・ヘスター著 土肥真人訳：エコロジカル・デモクラシー まちづくりと生態的多様性をつなぐデザイン, 鹿島出版会, p. 356, 2018
- 3) Ervin H. Zube, J. L. Sell, and J. G. Taylor, "Landscape Perception: Research, Application and Theory" *Landscape Planning* 9, no. 1 (1982)
- 4) 前掲1), p. 220
- 5) 斎藤晃吉：新潟県福島潟の歴史地理的研究, *人文地理*, 13 巻, 3 号, pp. 203-220, 1961
- 6) 佐々木葉, 安達幸輝, 外山実咲, 橋本航征, 渡邊拓巳, 小澤広直：新潟市における潟をめぐる市民活動の特徴, 第 57 回土木計画学研究発表会・講演集, 21-04, 2018
- 7) Ogawa, D. and Fukumoto, R.: Factors Influencing Attachment toward Fukushima-gata Lagoon: Analysing Changes in the Lifestyle of Regional Residents, *Water*, Vol. 11, No. 6, 1262, 2019.
- 8) 小野千晶, 尾崎晴男：教育による景観への意識と研究の効果, *景観・デザイン研究講演集*, No. 3, 331-337, 2007
- 9) 西村奏絵, 佐々木葉：「地域認識の把握手法に関する研究レビュー」, 第 51 回土木計画学研究発表会, 2015
- 10) 新潟市北区公式サイト, 区の概要  
<https://www.city.niigata.lg.jp/smph/shisei/soshiki/toukei/index.html> 最終閲覧 2019. 01. 03
- 11) 新潟市北区公式サイト, 葛塚東小学校/葛塚中学校学区  
[https://www.city.niigata.lg.jp/smph/kosodate/gakko/sho\\_chu\\_school/tsugakukuiki/sub02/01kita\\_ku/01kita\\_ku05.html](https://www.city.niigata.lg.jp/smph/kosodate/gakko/sho_chu_school/tsugakukuiki/sub02/01kita_ku/01kita_ku05.html) 最終閲覧 2019. 01. 06